

災害時の人権問題、差別について

中 一

今から三か月前、熊本で大きな地震がありました。その後も強く大きな余震が何度もあり、みんな大変な思いをしたと思います。

私も五年前、同じ経験をしました。二〇一一年、三月十一日、午後二時四十六分頃起きた東日本大震災。私はまだ小学一年生で、何が起こったのかわかりませんでした。電気や水道はすべて止まり、地震で物が倒れる音しかしませんでした。ただただ怖くて震えていたことを覚えています。

また、次の日には原子力発電所の事故の影響で、原発から六キロ圏内にあった私の家は、埼玉県の体育館に避難することになりました。しかし、体育館はどこも人でいっぱい、入れるところはなかなか見つかりません。その後も不安な気持ちのまま、バスで体育館を探し続けました。まるで暗闇の中へ突き進むように。

そのときです。バスの中で一人の赤ちゃんが泣きだしてしまったのです。私たちも苦しくて辛く

てたまらなかつたのですから、小さな赤ちゃんなら、なおさらでしょう。ところが、一人の男の人が、

「ああー。もう、うるせえな。女なんだからだまらせるよな。」

と言いました。赤ちゃんのお母さんは、皆に頭を下げてあやまりながら赤ちゃんをあやし続けています。その背中が、小刻みに震えているようでした。

私はその男の人の冷たさに腹立たしさがこみあげてきましたが、特に「女なんだから」という一言が頭から離れませんでした。女というだけで、男の人からそんなひどい言い方をされてしまうのか。赤ちゃんが泣いてしまうのは女性のせいではないし、男性だってあやすことはできる。それに、こんな状況で赤ちゃんが泣いてしまうのは当たり前でしょう、温かい目で見てあげなくてはいけないんじゃないの、と思いました。

今も避難所では、このようなことを言われている女性がいます。震災で皆が大変なのだから、「女性だから」と言われることがなくなっただけ、皆で支えていってほしいと思っています。

避難所では、食べ物は一入一つおにぎりが配られるだけ、また布団は一家族に二枚しか配られませんでした。まだ三月の体育館では、布団二枚では寒いし、おにぎり一つではお腹がすきます。また、施設や物にも限りがあり、特に困ったのがトイレです。一時間近く並ぶ行列ができることもありました。だからトイレをがまんする女性、水をひかえて体調をくずす女性がたくさん出るので、着がえも女性の大きな悩みでした。家族にタオルでかくしてもらったり、車の中のような狭い場所で着がえたりする人もいました。

避難生活で大変なのはもちろん女性ばかりではありません。けれど、「女性だから」大変なことでもたくさんあったのです。だから、災害時は女性や子供、お年寄り、病人、それぞれにあった支援を、なるべく早く行くってほしいと強く感じました。

福島の被災地では、いまだに電気や水道も通っていない所があります。元の家に住めず困っている人もたくさんいます。原発をどうするのか、どうなるのかの方向性もまだまだわからないままです。それなのに「被災者」というだけで差別されている人もいます。

「この県民じゃないんだから。」

「被災者は被災地に帰れよ。」

などと、たくさん差別をされている人がいるのです。なりたくて被災者になったわけではありません。帰れるものなら帰りたいたいのです。どこの人でも同じ人間にかわりはないでしょう。これからそういう差別をされる人が少なくなるように、いえ、無くなるように願います。

熊本では、今でもたくさんの方が避難所で生活をしています。辛い思いを背負ったその人たちが、少しでもいやな思いをすることがなくなるように、国や県の人たちにも女性が安心して着がえができる場所を増やす、トイレの数を増やす等避難所を充実させる活動をしてもらえたらと思います。また、赤ちゃんが泣きだしてしまったりときは、女性も男性も関係なく、皆で泣きやむように赤ちゃんをあやし、支え合っていく、それが当たり前だと思えるような国になってほしいと思います。

最後に、私は自分自身が大きな地震を経験したこと、毎日常家の布団で寝ることができ、ことがとても幸せなのだと思うようになりました。今

回、地震のあった熊本の人たちが、少しでも早く普通の生活に戻るように、食べ物や洋服などを提供する、節電に協力して無駄な電気を使わない、ボランティアがあれば参加して、熊本の人たちの助けになる活動を行っていききたいです。